

目 次

1. 「令和5年度事業」のご案内	
(1) 第18回広大マスタース主催講演会の報告	2
(2) 広大マスタース講師派遣講座	
(2-1) 2023年度夏期日本語・日本文化特別研修	3
(2-2) ちゅーピーカルチャーセンター講座	3
2. 「会員エッセイ」コーナー	
甲府空襲の断片	4
3. 会員情報	6
(1) 新入会員について	
(2) 退会会員について	
(3) 訃報	



「令和5年度事業」のご案内

(1) 第18回広大マスターズ主催講演会の報告 『ChatGPT 生成 AI（人工知能）との付き合い方』

広大マスターズ幹事 谷本 能文

最近、生成 AI が世間をにぎわせている。そこで、2023年07月23日（土）13:30～15:00、東広島市芸術文化会館研修室において、広島大学上席特任学術研究員・特命教授の相原玲二先生に講師をお願いして、『ChatGPT 生成 AI（人工知能）との付き合い方』の講演会を実施した。出席者数は約35名。

AIには識別系のAIと生成系のAIの2種類がある。前者は、学習に基づきデータをクラス分けするのが目的で、画像・音声などを入力して識別結果を出力する。後者は、学習に基づきあらたなデータを生成するのが目的で、テキスト・画像・音声などを入力、テキスト・画像・音声などを出力する。生成AIは以前から利用されていたが、テキストからテキストを生成するようになり、特に注目されるようになった。ChatGPTなどの対話型のAIは、あたかも人間と自然に会話をしているかのような応答が可能であり、文章作成・翻訳等の素案作成など、民間企業等では多岐にわたる活用が広まりつつある。これらのAIは、あらかじめ膨大な量の情報から深層学習によって構築した大規模言語モデルに基づき、ある単語や文章の次に来る単語や文章を推測し、「統計的にそれらしい応答」を生成するものである。指示文の工夫でより確度の結果が得られるが、回答は誤りを含む可能性が常にある。生成AIは基盤技術として大いに普及するとともに、DX（デジタルトランスフォーメーション）推進のための強力なツールとなるだろう。生成AIは、「気を付けて、積極的に使いましょう」。



(講演会の様子)

(2) 広大マスターズ講師派遣講座

(2-1) 令和5年度夏期日本語・日本文化特別研修に2講師を派遣

広大マスターズ幹事 金田 晋

表記特別研修は毎年夏・冬期2週間、中国、台湾、非漢字圏の3クラスに分けて行っています。

今期も台湾(7/7-7/20)と非漢字圏(7/24-8/6)の両クラスは、広大東広島キャンパス(西条)にて対面方式で行いました(参加学生:台湾9名;非漢字圏4名)。中国クラス(8/16-8/25)はまだオンライン方式をつづけています(参加学生79名)。非漢字圏クラスは酷暑の最中でしたが、参加のベトナムホーチミン市からの学生は「別に」と意に介していませんでした。どのクラスも参加学生は皆活気があり、よく聴いていました。

広大マスターズ会員の下記2名が3クラスの講義各1コマを担当しました。

金田晋「日本の絵画-鳥獣戯画の世界」/渡部和彦「日本の伝統スポーツと礼-武術から武道へ-(日本のスポーツ科学紹介)」。「日本の精神と身体パフォーマンス」を共通テーマとしてはどうか。現代哲学のもっとも人気のあるテーマです。

金田講義:2部構成。第1部「広島と美術環境」広島城と原爆ドーム(旧広島県物産陳列館)に巖島神社を加えた広島案内。第2部「絵巻物と鳥獣戯画画巻」日本の漫画、アニメの元祖国宝絵巻物を概観したあと、「鳥獣戯画画巻」甲巻の最初から最後まで場面を追って読解。

渡部講義:広大剣道部学生の協力で有効打突部位の紹介。日本剣道型の演技、華道、茶道等との共通点等。最後に、全受講生とともに、「メン」打ち動作と「メーン」発声で終了。

(2-2) ちゅーピーカルチャーセンター講座に2講師派遣

広大マスターズ幹事 金田 晋

表記講座西条教室は平成24(2012)年オープンし、3ヶ月1クール年4回で開かれてきました。以来11年間、コロナ感染のあおりを受けて休講にした一時期を除けば、教室は今日までずっと開講しています。4年前、教室は西条中央通りからJR寺家新駅近くに移転。いまでは新興の寺家地区における文化のセンター的役割を果たしています。開設科目は多彩。創設以来開いているマスターズ2会員担当の芸術科目(実技、理論)は「ちゅーピーの顔」と自認しています。

難波平人会員「水彩・油絵」(毎月第1金曜日)

金田晋会員「世界の近代美術を楽しく学ぶ」(毎月第2・第4金曜日)

令和5(2023)年も健在。難波クラスは受講者11名(7月末現在)。描いた作品は、難波会員主宰の市民講座と共同でくらのギャラリーの展覧会に出品。金田クラスは受講者12名(7月末現在)。受講者のうちには広島市や三原市からの常連もおられますが、今クールから佐伯区五日市からも参加。春と夏それぞれ、ひろしま美術館で開かれた19世紀フランス風景画展とピカソ展を団体鑑賞し、同館の古谷可由学芸部長から別室で詳しい解説を受け、質疑を愉しみました。

甲府空襲の断片

広大マスターズ会員 太田 安英

甲府市のホームページには「甲府の歴史」のコーナーがあり、甲府空襲が取り上げられている。空襲されるまでは、駿河湾から北上して来る B-29 が甲府盆地上空で東京へ方向転換するのを眺めるだけの毎日だったから、突然の空襲はショックだったと思う。空襲での焼失は市域の 74%、死者は 1974 年の調査で 1127 名だったとされる。

1945 年（昭和 20 年）7 月 6 日に起こった甲府空襲のとき、私は甲府城から近い甲府市愛宕町に住んでいた。記録によれば、甲府の空襲は夜半の日付けが替わる頃から始まったという。7 歳の私は母に叩き起こされたに違いない。しかし逃げるときの恐怖心など感情的なことは何も覚えていない。覚えていないから感情が無かったかということ、それはそうと思えない。不思議に記憶がメモ的なのである。

私には昭和 19 年生まれの妹（まだ赤ん坊）がいた。物資不足のため栄養状態がとても悪かったから、靴下のゴムが彼女の皮膚に食い込み、そこから化膿して治らないような状況だった。太宰治の長女も甲府空襲のさい、重症の結膜炎のため目が見えなかったとあるが（「薄明」参照）、こちら医療が不十分なだけではなかったのかもしれない。

寝ていた家から逃げるとき、妹は母が背負ったと思う。父の記憶は無い。たぶんいなかったのだろう。山梨工業専門学校（現山梨大学工学部）の先生だったけれど、陸軍の技術将校でもあったから、東京に出張していたのだろう。

最初に逃げ込んだのが防空壕。場所は正確に判らないが、すでに混んでいるのを無理して入れてもらったと記憶する。覆いの無い入口に陣取って、飛来する B-29（赤い標識灯を点けていた？）から落される焼夷弾の束、それが途中でバラバラになって落下する様をつぶさに見た。

（対日戦で多く使われた焼夷弾は、6 ポンド（約 2.7 kg）のナパーム弾で、外形は六角柱、集束焼夷弾として投下されたという）

突然、地面を揺るがす焼夷弾の落下音。周辺に焼夷弾がばらまかれたのだ。防空壕の奥にも落ちた（もしかしたら天井が抜けた）。奥の人たちの被害が分からないものの、急かされてわれわれは山に向かって逃げ出した。真っ暗な道には、飛び散った油があちこちで大きく、小さく燃えていた。後に大人が言うには、防空壕は未完成だったという。

空襲は 2 時間ほどで終わらした。静かになった空とは裏腹に、真っ赤に燃え盛る甲府中心市街をただ、ただ見下ろしていた。いつか遊びに行った N 君の家も燃えているのかな？そして N 君は上手く逃げたかな？実はこの疑問は今でも続いている。言い換えれば、2 学期の小学校で再会出来なかったのだろう。

空襲のあと日が経つにつれ被害の状況が伝わってきた。甲府に疎開していた太宰治のように焼夷弾の火を消した人もいたが、最も強く印象付られたのは、焼夷弾の直撃で亡くなった人と目の前に焼夷弾が落下したけど全く無傷だった人の運命の違い。そしてお隣のおばさん（年令不明）が焼夷弾の油をかぶって火傷で亡くなったこと。おばさんは私を可愛がっていたということで、ご遺体に別れを告げに行った。焼けただれた顔を凝視しながら、どこで油をかぶったのかな、と思った。もしやあの防空壕で？

空襲のときの家は貸家だった。ここにも一発の焼夷弾が落ちた。運が良かったことに、焼夷弾は屋根と私の勉強机を貫き、畳で止まったものの、発火しなかった。不発弾だった。しかし、親の言い分では「悪質な」大家により、まもなくこの家から追い出されてしまった。

空襲から一月後、「玉音放送」は大人と一緒に近所の愛宕神社で聞いた。畳の上にポツンと置かれたラジオの前にみんなが正座した。打ち沈む大人の中で、私はどうしたらいいか分からない存在だった。

戦後の新しい生活は、武田信玄公菩提寺の法泉寺本堂（と記憶する）で始まった。本堂での居住場所は定かでない。他に避難者がいたわけではないから、甲府一中（現甲府第一高校）の先生だったT住職のご好意によるのだろう。ただトイレがなく、提灯の灯りで父と共に、墓地に設けられた便所まで行った。苔むした墓石の上に、空襲で亡くなった人々の火の玉が飛びそうでもと怖かった。しかし代わって蛍がたくさん飛んでいた。このとき父に「北斗七星」を教わった。本堂にはムカデやヤスデがたくさん出没した。

通っていた山梨師範附属小学校の校舎は燃えてしまった。父の山梨工専の建物もしかり。両者は師範学校を挟んで近かったから、よく工専に遊びに行き、玄関前のツツジの蜜を吸ったことがある。そのツツジも燃えてしまった。

2学期の授業は焼け残った師範学校の建物を使って行われた。午前と午後の2部制だった。お寺から毎日通った。冬を越し2学期を終えた翌年の春（昭和21年）には、茨城県多賀町（現日立市）にあった多賀工業専門学校（現茨城大学工学部）に移ることになった。

父が茨城に移る決意をしたのは、多賀町が空襲を受けておらず、工専には研究ができる部屋があったからかもしれない。住居と言えば立派な戸建の官舎だった。

しかし、ここにも戦争の悲惨さが生々しく残っていた。前年の7月17日には米軍による「艦砲射撃」（沖合の戦艦からの砲撃）があり、校長が直撃弾で殉職、他にも寮生13名・職員1名が死亡していた。私が行ったとき、校長の官舎跡には砲弾の大穴がポツカリ空いていた。

私にとって甲府と言えば、ずっと南アルプス登山や観光旅行の通過地だった。ところがある時山梨大学工学部を訪れる機会を得て、「空襲で逃げ惑った」愛宕町の狭い坂道を探す決心をした。見当をつけて尋ねても空襲を知る人には出会わなかったが、遂にその坂道だけでなく、60余年前に住んだ「旧居」まで発見した。

そのインパクトは旧知に出逢った喜びとは異なり、何か心の奥底に埋れていたものが掘り起こされた感じだった。そして私の生き方の迷いの原点がここにあったことを知った。



会員情報

(1) 新入会員について

本年度は下記2名の新入会がありました。

坂田省吾氏（人間社会研 23） 鈴木孝至氏（先進理工系研 23）

(2) 退会会員について

本年度は下記2名の退会がありました。

小尾孟夫氏（教育研 07・監査 15-20） 景山満子氏（図書館 03）

(3) 訃報

本年度は下記1名の訃報が寄せられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

水岡繁登先生（学校教育学部 1991年退職） 2022年12月9日ご逝去



【広島大学マスターズ事務局】

（郵便物宛先）〒739-8601 東広島市西条栄町 8-29

東広島市市民協働センター内 メールボックス No.5「広大マスターズ」

Eメール：masters@hiroshima-u.ac.jp

URL：（会員版） <https://masters.hiroshima-u.ac.jp>

（かわら版） <https://hirodaimasters.web.fc2.com/index.html>